図画工作教育講座　《　叱る　》

子どもに「どんな先生が好き？」　→　「優しい先生」ダントツ１位！男子でも！女子でも！どの学年でも！

しかし　優しいばかりでは、
甘い先生　子どもから友達扱い・要求はエスカレート　→　学級は崩壊する。

学校生活は集団生活→　集団としてのルールがある
怒る先生　いつも子どもに注意する先生・子どもは敬遠。

教育は「優しさ」と「厳しさ」の二面性がある。
普段は優しくても、これだけは譲れない一線を持っている先生を子どもたちは尊敬する。

譲れない一線とは、
＊命にかかわること　　危険な遊び・体育館の天井裏に昇るなど
＊人の迷惑になること　　大声で騒ぐ・ルールを守らないなど
＊人間として、してはいけないこと　いじめなど

叱る先生　これだけは譲れない一線を持っている先生
例えば、廊下を走る行為を
＊　ぶれずに　　その日の気分で注意したりしなかったり
　　善悪の判断基準を育てるつもりが、顔色を伺う人間を育てることに。

＊　わけへだてなく　普段まじめな子・女子は叱らない
　　何で自分だけ！行為を反省するよりも、不満と反発

＊　行為のみを　　人格を叱る(いつも落ち着きがない・注意力が足りない・だらしないetc.)
　　これから気をつけようという反省・向上心よりも、自分はダメな人間なんだと
　　自虐・マイナス思考に陥らせてしまう。これでは心は育たない。

※　感情的になると「怒る」
　　「叱る」は冷静に。深呼吸が効果的。この子を育てるために叱るのだと思えるようになる。
これが重要
＊　必ずフォロー　叱りっぱなしはダメ。
　　下校までに何か一つ褒めて立ち直らせて帰す。
　例えば、給食時間にふざけていて叱られた子どもを帰りの会の後、呼び寄せて「君は５時間目の授業をきちんと聞いていたね。とてもよいことです。先生は感心した」とフォローする。(叱られた後で単に落ち込んでいただけかも。でも、フォローの材料になって、子どもは立ち直って下校できる。)

＊　私がこの講義で学び最も重要だと思った内容は「生徒を叱る」ことについてである。
　何故かというと、現に私がアルバイトをしている塾で、私が生徒をうまく叱れていないからである。私は

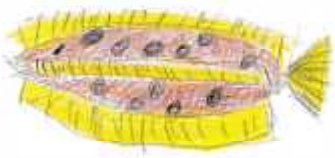
生徒に嫌われるのを恐れ、しっかりとした「叱る指導」ができていない。
　この講義では、生徒を「叱る」際に、教師の主張に一貫性を持たせること、生徒を叱った後にフォローを入れることなど「叱る」準備と心構えを身に付けた。本当に生徒の未来を思う教師になるのであれば、しっかりと「叱る」ことのできる教師になりたいと強く思った。

＊　叱ることについて、行動のみを叱って子どもの人格を否定しないことや、ムラをつくらないようにすることが重要だと思いました。その子のいいところを見つけて褒めるのも、すぐにできることではないと思いますが、叱るべきときは叱るというのも、実際には難しいのだろうと思いました。
　褒めるところは褒めてあげて、譲れないところは叱るという教師が，子どもを育てていくうえで求められているんだなあと感じました。

＊　怒ると叱るでは違うことがよく理解できた。中・高時代、自分の感情で怒るときもあれば怒らないときもある先生がいたので、首尾一貫して叱る大切さが納得できたからである。また、行為のみを叱り，行為者の人格を否定してはいけないと言われたことも納得できた。
　優しい先生＝叱らない先生と、よく勘違いされるが、叱ることのできる先生が，特に怪我に注意しなくてはならない図工には求められると思うので、このことが重要だと思った。

＊　私はこの講座で、知らなかった技法もたくさん学ぶことができましたが、最も印象深かったのは「叱る」ときのコツです。
　もし私が教師になって、叱らなければならないときに、このコツを踏まえて指導ができたら，子どもも理解して良好な関係を築けると思ったから、このことが最重要だと思いました。実習のときや実際に先生になったときにも，この講座で学んだことを生かしていきたいです。

＊　この講座では、褒め方だけでなく叱り方についても話がありました。私は，叱るにも注意が必要なのだと改めて考えさせられました。分け隔てなく叱るのはもちろん、出来事のみを叱るというのが印象的でした。時と場合によるとは思うけれど、そのときの出来事のみを叱るというのは難しいけれど、とても大切なことだと分かりました。
　どんな叱られ方をしても、子どもは少なからずショックを受けると思います。けれど叱ることは教育の中でとても大切なことだと思うので、子どもの様子やタイミングを考慮しながら，きちんと子どものためになるような叱り方をするべきだと感じました。


不思議なお魚